

天文十五年丙午小春日

沙彌弘順

大工能州中井住

藤原川崎

次郎左衛門吉久

十二月十三日。珠洲郡不動寺山王社の上葺成る。

【不動寺藏棟札】 珠洲郡

一三三六

(表)

山王奉<sub>二</sub>上葺<sub>一</sub> 願主不動寺敬白

(裏)

(第一行)

百文彌勒院

五十文松之坊

五十文和かさ

五十文

常定坊

千人講成就院

(第二行)

于時天文十五年十二月丙午十三日

法師順智

(第三行)

百文親成尊

五十文仁位公

此年一國德濟霜月十九日七時行候。

日七時行候。

天文十六年

丁未

紀元二二〇七

七月廿八日。能登守護島山義續、山城東福寺栗棘庵が足利義藤の動座せることを報じたるに答ふ。

【栗棘庵文書】 山城

一三三七

(足利義藤)

就公方様被<sub>レ</sub>移御座候、急度注進、祝着此事情。相替儀候者、重而可<sub>レ</sub>示給候。猶温井備中守可<sub>レ</sub>申候。恐々謹言。

七月廿八日

義續 在判

栗棘庵

(本文は、將軍足利義藤輝がこの年三月廿九日京を出で山城北白川城に入り、七月十九日北白川城を燒きて近江坂本に奔りし際のことなり。)

聞七月七日。能登守護島山義續の被官飯川光誠、笠松新介の羽咋郡押水に於ける戦功を賞す。

【笠松文書】

山城

一三三八

至于端郡押水、駿河殿一戦之刻分射、則駿河殿被渡相、太刀討、太刀疵被疵候。無比類御高名ニ候。彌向後御心懸

貞等、山城東福寺栗棘庵に、島山駿河の侵入を撃退したることを報す。

肝要候。恐々謹言。

(天文十六年) 壬七月七日

飯川主計助

誠 在判

笠松新介殿

御宿所

(端郡は口郡と同じく、羽咋・鹿島二郡の總稱なるべし。)

【笠松文書】

一三三九

去廿六日於遊左馬之下口、被射可<sub>レ</sub>然矢、無比類御働之由候。御高名之至無是非候。彌御馳走肝要候。恐々謹言。

温井備中守

(年不詳) 十月廿九日

總 貞 在判

笠松新介殿

御宿所

(第二通は年次不詳といへども、笠松新介のことに係るを以て茲に之を合叙す。)

聞七月廿四日。能登守護島山義續の被官温井總

貞等、山城東福寺栗棘庵に、島山駿河の侵入を撃退したることを報す。

【栗棘庵文書】 山城

一三三〇

猶々被<sub>レ</sub>成御祈念配帙被<sub>レ</sub>下置候。令披露候處、御懇之義一段喜悅旨、相意得可<sub>レ</sub>申入由候。拙者へも被<sub>レ</sub>懸御意候。則致頂戴候。是又御懇切之義畏入存候。

就當國牢人出張之儀、急度被<sub>レ</sub>下置御飛脚候。御造作之義無是非候。御狀之通則令披露候處、祝着之旨以<sub>レ</sub>直書被<sub>レ</sub>申候。猶相意得可<sub>レ</sub>令申由候。去七日於賀州堺及一戰、駿河父子三人其外數百人討捕落居候間、可<sub>レ</sub>御心安候。拙者ハ不慮之儀候ニ付而不<sub>レ</sub>令出陣候。無念候。乍去同名者共致一番合戦、高名仕候間満足候。委曲猶從釣山軒可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候。併期後音候。恐々謹言。

河父子三人其外數百人討捕落居候間、可<sub>レ</sub>御心安候。拙者ハ不慮之儀候ニ付而不<sub>レ</sub>令出陣候。無念候。乍去同名者共致一番合戦、高名仕候間満足候。委曲猶從釣山軒可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候。併期後音候。恐々謹言。

申候。併期後音候。恐々謹言。

致一番合戦、高名仕候間満足候。委曲猶從釣山軒可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候。併期後音候。恐々謹言。

致一番合戦、高名仕候間満足候。委曲猶從釣山軒可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候。併期後音候。恐々謹言。

申候。併期後音候。恐々謹言。

聞七月廿四日

總 貞 在判

栗棘庵 御報

(正色)

温井備中守

栗棘庵 御報

總 貞